

# SHOW HEY シネマルーム

<b>赤と黒 デジタルリマスター版</b>	
1954年 2009年・フランス映画 配給/セテラ・インターナショナル 192分	
2009(平成21)年12月19日鑑賞	テアトル梅田

## Data

監督:クロード・オータン=ララ  
原作:スタンダール『赤と黒』(光文社古典新訳文庫刊)  
出演:ジェラルール・フィリップ/ダニエル・ダリユー/アントネラ・ルアルディ/アントワーヌ・バルペートレ/アンドレ・ブリュノ/ジャン・マルティネリ/ジャン・メルキュール/アンナ=マリア・サンドリ

## 👁️👁️ みどころ

平民の出身ながら、知性と美貌を武器に貴族社会に這い上がろうとした青年ジュリアンの野望とは? その行き着く先は? 人妻との許されない恋と決別した彼には、じゃじゃ馬的な侯爵令嬢との悩ましい恋が続くが、さていかに対応?

鮮やかな赤と黒の色彩で復活した1954年の大作は、魅力いっぱい。壮大なスケールの時代絵巻と古典的な純愛(?)の展開、そして悲劇的な結末をタツプりと堪能しよう。

## スタンダールの名作が今! あの美青年の代表作が今!

1789年のフランス革命、その後のナポレオンの登場と失脚。そんな波乱万丈の時代を経たフランスの1820~30年代は、軍人に代わって僧侶が幅を効かせ、貴族が復活した時代。そんな中途半端な安定期(?)における、平民出身の野心的な青年ジュリアン・ソレル(ジェラルール・フィリップ)の貴族社会への挑戦と死をも厭わない情熱的な恋を描いた名作が、フランスの文豪スタンダールの『赤と黒』だ。美貌の青年ジュリアンと貴族の人妻ド・レナール夫人(ダニエル・ダリユー)との許されることのない愛、それに続くジュリアンと侯爵令嬢マチルド(アントネラ・ルアルディ)との何となく革新的かつ前衛的な愛は、中学時代の私にとってちょっと危険な香りのする世界文学全集への登竜門だった。

本作は1954年のフランス映画だが、それがデジタルリマスター版として復活したのは、ジュリアンを演じたジェラルール・フィリップの没後50年特別企画によるもの。フランスの不世出の映画スターであるジェラルール・フィリップは、36歳にしてこの世を去っ

たらしい。1949年生まれの私はもちろん彼の名前を知らなかったが、本作をはじめ彼が主演した『パルムの僧院』(47年)や『肉体の悪魔』(47年)などは、中学時代に映画雑誌で読んだ記憶がある。そんな名作の復活とジェラルド・フィリップの復活に拍手!

## 「プラス10分」の意味を考える

今回デジタルリマスターをはじめて観たうえでパンフレットを読み、面白いと思ったのは、山中陽子氏の「『赤と黒』の映画の謎」という解説。それによると、本作の上映時間は初公開時は144分だったらしい。また、過去4回の映画祭での上映時間は182分だったらしい。それに対して、今回のデジタルリマスター版は192分になっている。

もともとクロード・オタン＝ララ監督が波乱万丈のスケールをもったスタンダールの代表作を映画化するにあたっては、2部構成の4時間の大作にしたかったらしいが、映画会社の反対で1本の映画にさせられたうえ、編集段階であちこちがカットされたらしい。どこがどうカットされ、逆に何が追加されたのか、そこまでわかる人はまずいないだろうが、山中氏の解説を読めば182分が192分への「プラス10分」の意味がよくわかる。こりゃ必読!なるほど映画って、編集によっていかようにも変わるわけだ。

## スタートは法廷シーンから

本作のスタートは法廷シーンから。これを観ていると、1820年代におけるフランスの法廷のあり方がよくわかる。ちなみに『マリー・アントワネットの首飾り』(01年)『シネマルーム1』68頁参照)ではフランス革命前後のフランス王制下での裁判制度のイメージがよくわかったから、それと併せて勉強すれば、より効果的。もっとも、本作では検事も弁護士も一言も発言しないから、法廷技術の参考にはならない。しかし、えらく権威的に陪審員に対して語りかける裁判長から、「何か言いたいことがあるか?」と問われた被告人ジュリアンが述べる最終意見陳述の言葉が印象的だ。それは、法廷や裁判長に対して自分は許しを請おうとは思っていないことを前提として、自分の罪は下層階級の自分が貴族階級に這い上がろうとしたことだと断言するもの。その潔い態度はまるで、関ヶ原の合戦で敗れ、捕らわれ人として徳川家康の前にひき出された石田三成が、豊臣家のために戦った自分は天地神明に誓って恥じる处はないと断言する姿勢と同じ・・・。

## 罪名は? 動機は? 判決は?

ジュリアンが今殺人未遂罪で裁かれているのは、教会内でルイーズに対してピストルを2発発射したため。幸い2発とも弾は当たらなかったが、ジュリアンがそんな行為に及んだのは、若い司祭の命ずるままにルイーズがジュリアンとの道ならぬ恋、神に許されない恋を告白する手紙を書いたことに対する怒りのため。これによって、せっかくド・ラ・モール侯爵(ジャン・メルキュール)の力によって中尉に任官し、侯爵令嬢マチルドとうま

くやっていると有頂天になっていたジュリアンの野望はボツになってしまったわけだ。もちろん、ジュリアンの行為は外形的には殺人未遂罪だが、量刑上大切なのはその動機。ジュリアンがそんな行為に及んだのは、ホントにレイズに対する怒りのため？それとも？

そこらあたりの人間の気持を深く観察し感動的に描いているからスタンダールの『赤と黒』は現在まで広く読み継がれているわけだから、まずは冒頭のジュリアンの最終意見陳述を聞き、彼の問題意識をしっかりと確認したい。しかし、あんな挑発的な意見陳述をしたことは、量刑上きつと不利になるのでは？

## 自問自答するジュリアンの姿に強く共感！

『サマリア』(04年)(『シネマルーム7』396頁参照)、『うつせみ』(04年)(『シネマルーム10』318頁参照)、『プレス』(07年)(『シネマルーム19』61頁参照)で有名な韓国のキム・ギドク監督や、『アンナと過ごした4日間』(08年)を撮ったポーランドのイエジー・スコリモフスキ監督など極端にセリフの少ない映画をつくる天才・奇才は多いが、1954年につくられた本作の映像表現はオーソドックス。ナレーションの多用や内心の意思についての独り言の多用は映画をダメにすることが多いが、クロード・オータン＝ララ監督は本作でジュリアン自身の言葉で内心をあえて語らせ、それを観客に明確に示している。

貴族社会への挑戦とかなりヤバい恋物語がメインの本作では、ジュリアンは多くの場面で進むべきかそれとも退くべきかの選択を迫られることになる。その最初は、夫のド・レナール町長(ジャン・マルティネリ)の目を盗んで妻レイズの手を握るかどうかだが、それを実行してしまうと次はすぐにレイズの寝室に忍び込んでいくかどうかまでエスカレート。また、高慢で奔放なマチルドから「ハシゴで2階まで上がってきて」というメモを渡されたジュリアンは、内心どのような葛藤を経てその実行へ？

ジュリアンほど波乱万丈の人生を送っているわけではないが、弁護士生活を35年間送ってきた私だって、その人生は迷いと決断の連続。とりわけ、いくつかの節目ではそうだった、そんな時私はいつも内心で自問自答しているが、本作におけるジュリアンの自問自答の姿をみると、私と全く同じ。そんな自問自答するジュリアンの姿に強く共感！

## <赤と黒の色彩美はお見事！

あなたは「ノーブレス・オブリージュ」という言葉を知ってる？これは「貴族の義務」あるいは「高貴なる義務」というもので、高貴なる立場にある者(貴族階級)は、高貴なる義務を果たす社会的責任を伴うという考え方だ。したがって、いざ戦いとなれば貴族階級は将校や士官として兵を率い、最も危険な任務に就くべきだということになる。スタンダールの名作『赤と黒』の「赤」は何を象徴するものかといえ、私はそれは「情熱」だ

と理解しているが、本作では「赤」はフランス将校・士官の真っ赤な軍服に表現されている。去る11月29日から放映を開始したNHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』では、兄秋山好古の騎兵服、弟秋山真之の海軍士官服がそれぞれ凛々しいが、2人ともこれから地位が上昇するにしたがってその軍服にはさまざまな「飾りモノ」がついてくることになる。1820～30年代のフランス軍将校・士官は、下は白いズボンだが上着は赤を貴重とした派手なもの。

他方、「黒」は何を象徴？これは貴族と共に当時特権階級にあった僧侶の服だ。全身黒づくめの服装は究極のおしゃれらしいが、クリスチャン・ディオール風の僧侶服(?)を華麗に着こなしたジュリアンの姿に多くの女性は惚れ惚れするのでは？もちろん赤の軍服だって、短足で腹の出っ張ったド・レナール町長やド・ラ・モール侯爵の息子に比べるとジュリアンのカッコ良さは段違い。戦闘シーンが全くなく、ファッションショーだけ(?)に終わっているのが少し残念だが、本作における赤と黒の色彩美はお見事！

## ルイーゼの決断は？ジュリアンの魂の救済は？

本作の恋物語は、前半がジュリアンとルイーゼ、後半がジュリアンとマチルドと、はっきり2つに分かれている。侯爵令嬢マチルドの当時としては大胆な生き方には驚かされるが、ジュリアンとマチルドが共同戦線を張ることによってスキャンダルを恐れる急態としたド・ラ・モール侯爵をうまく説得できたのは立派なもの。やはり、女でもしっかり本を読んで勉強した甲斐があるとういうものだ。しかし、これにてジュリアンとマチルドの恋が成就し、ハッピーエンドとなったのでは物語は面白くない。最後にもう一波乱、クライマックスを用意しなければ・・・。

ジュリアンを得意の絶頂から地獄の底へ突き落としたのはルイーゼの手紙だが、なぜルイーゼはそんな手紙を書いたの？そして、今日はジュリアンの判決言渡の日。大阪地裁でもマスコミを賑わす大事件では、傍聴券を求める人でいっぱいになるが、それは当時のフランスでも同じ。法廷前はマスコミ関係者を中心とする人(?)たちでいっぱいだが、そこに乗り込んできたのが夫と子供と一緒にルイーゼだ。ジュリアンのピストルによって危うく殺されかけたのに、ルイーゼはジュリアンに対して恨みではなく、なお愛情を？ルイーゼの夫は「ここで馬車を降りることは、自分や子供たちと永遠の別れを告げることになる」と強く諭したが、ルイーゼの決断は？そして、その後のルイーゼの行動は？とことんギリギリの局面になると、やはり女は強いということを実感！他方、もはや2度とルイーゼと会うことはできないまま死刑になるものだど覚悟していたジュリアンが、目の前にルイーゼの姿を見た時の驚きと感動は？

己の才覚と美貌を最大限活用して貴族社会に這い上がることを唯一の目標としてきたジュリアンの、魂の救済とは？そんな感動的なクライマックスは、あなた自身の目でじっくりと。

2009(平成21)年12月21日記